

『卜居集卷之下』注釈(二) 村居四時雜題十九首他

山口 旬

本稿は『卜居集卷之下』(二)に続いて、下巻の後半部の注釈を試みたものである。

107 田家二首 ◇ 1

吉日耕桑就事初 吉日 耕桑 事に就く初め
各携輕錘向丘區 各々 輕錘^{きよづ}を携へて 丘區に向ふ
七十村翁手持酒 七十の村翁 手ら酒を持して
祭來田祖飲農夫 田祖を祭り來て 農夫に飲ましむ

【訳文】養蚕のために桑を刈り取り始めるのによいという吉日、それぞれ軽い鋤を携えて、丘の桑畑の分担地に向かう。七十にもなる村の翁だけは手に鋤ではなく酒を持ってきて、養蚕の神に御神酒を祭ってから、農夫にも飲ませるのだ。

○田家 農家。范成大の四時田園雜興晚春三首目に見られる語でその影響下の詩題。『聯珠詩格』向雪湖「田家」にも「老翁八十猶強健」

山口 旬 『卜居集卷之下』注釈(二) 村居四時雜題十九首他

の句がある。○吉日 これも四時田園雜興春日十一首目にある語。養蚕を予祝する習俗が各地に様々あった。例えば、『卜居集』120詩の評文に「那人、仲春初午を以て田神を祭る」とある。これは所謂、初午で二月最初の午の日。稻荷社を祭るが、この日を蚕の祭日とする風習もある(『年中行事事典』)。○耕桑 桑の若い葉は蚕の餌。○田祖 神農など一般的に農業の神を指すとも考えられるが、ここは養蚕の神であろう。

◎田家二首の連作は、四時田園雜興といくつかの語彙を共通するだけでなく、その夏日の四・五首目に直接的に学んだ習作的作品と見られる(次詩注参照)。四時田園雜興六十首は他にも養蚕に関係する詩が多い。

◎上平声六魚「初」、上平声七虞「區、夫」の通韻。七絶。

108 ◇ 2

戸々葉蚕方已熟 戸々の桑蚕 方に已に熟す
繰湯湧雪上繰車 繰湯 雪を湧して 繰車に上す

數端素絹都充稅 數端の素絹 都て税に充つ
 纒為兒孫長丈餘 纒に兒孫の爲めに丈餘を長うす

意思質直。身長深圍而不知桑蚕之艱難者、可以鑒矣。

意思、質にして直。身は深圍に長じて、桑蚕の艱難を知らざる者、以て鑑すべし。

【訳文】どこの家でも桑を食べた蚕がちょうど熟蚕となつて繭を作っている。糸を繰る為の湯の中から真つ白な雪のような糸が沸くかのように糸繰り車に上つていく。しかしこの数反の白絹は全て納税に充てられる。兒や孫のためにわずかに残せるのは一丈餘の長さなのだ。

詩に述べられた思いは質朴で素直である。箱入りで成長して養蚕の苦勞を知らないものは、この詩を読んで参考にするべきだ。

○桑蚕 蚕そのものを指す。「桑蠶到老絲長絆」(宋・謝逸、花心動閨情)など。○霽 雪の本字。蚕は年間何回も繭を作る。こゝは後述の「百沸繰湯雪涌波」(范成大)の句に見られるように比喻としての雪なので時季は不明。○繰車 糸繰り車。范成大詩は「繰湯」「繰車」と同字を用いているが、詩佛は同字を嫌つて「繰車」と

した。繰車は陸游「春日小園雜賦」に「日驅秧馬聽繰車。」などに見られる。○端 反と同じ。二丈(二十尺)、のち一丈八尺の布地。○税 范成大詩に「大耋催稅急於飛」の句がある。詩佛が現実の社会批判の表現を示したというより范成大の詩の世界を敷衍したのである。

◎晚春田園雜興十二絶(南宋・范成大)の四首目「百沸繰湯雪涌波、繰車嘈噴雨鳴蓑。桑姑盆手交相賀、綿繭無多絲繭多。」五首目「小婦連宵上絹機、大耋催稅急於飛。今年幸甚蠶桑熟、留得黃絲織夏衣。」の句を転用している。

◎韻字は熟は踏み落とし、車は通常六麻だが六魚にも通じる(佩文韻府「又魚韻」。餘は六魚。七絶。

109 宮怨

莫論春綠早兼遲 論ずること莫かれ 春緑の早と遅と
 一得秋霜孰不萎 一たび秋霜を得ば 孰か萎まざらん
 長信宮中啼月夕 長信宮中 月に啼くの夕
 昭陽殿裡舞花時 昭陽殿裡 花に舞ふの時

去帆之順風即掃帆之逆風。轉結怨而不乱得詩人之體焉。

去帆の順風、即ち掃帆の逆風なり。轉結、怨みて乱れず。詩人の體を得たり。

【訳文】春の草々の萌える早い遅いなど論じてもしかたないことだ。一回秋の霜が降りれば、どちらか萎まないではいられないからだ。長信宮の中では、月の夕べに泣いている人がいると思えば、その時、昭陽殿の中では花に舞う人がいる。しかしどちらか一時の春の花と同じなのだ。

往くときには帆に順風だったものが、すなわち帰りになると同じ帆に対して逆風となる。転結二句は、怨みの気持ちを含みつつも乱れた調子ではない。詩人のあるべき姿を得たものだ。

○宮怨 唐詩に多い閨怨詩の詩題であり、その摸倣作で明詩にも多い。○秋霜 白髪に喩える。ここは美貌の衰えから君寵を失うことを喩える。一般的な語彙だが、非常に有名なのは「不知明鏡裡、何處得秋霜」（盛唐・李白、秋浦曲其十五）である。○長信宮中、昭陽殿裡 漢の成帝の妃、班婕妤は張飛燕姉妹に君寵を奪われて長信宮に退き、昭陽殿には張飛燕が住んだという故事に基づく。ここでも暗にその二人を指す。

◎山本北山の『下居集』序文に「當時の詩風 李王の毒に染むこと深し。近ごろ稍く其の非を覚る者有り。然れども沈痾痼疾、遽に脱然すること難し。天民、始より其の毒に中らず。」とあるように、詩人は世代的に前代の格調派の影響を受けていないと言われるが、この詩は、格調派の奉じた盛唐の王昌齡「長信秋詞五首 其五 長信宮中秋月明、

昭陽殿下搗衣聲。白露堂中細草迹、紅羅帳裏不勝情。」と、对句と草の詩想を共通し、全面的にこの詩の影響下ににある。『下居集』を習作期の作品として後年の詩人は認めていなかったのはこうした点であろう（詩聖堂詩話）。

◎上平声四支。七絶。

110 送川村翁（川村翁を送る）

雁群初到送君朝 雁群 初めて到る 君を送るの朝

故憶風光行處饒 故らに憶ふ 風光 行く處に饒きことを

山館夜寒頻轉枕 山館 夜 寒くして 頻りに枕を轉じ

江亭月冷坐吹簫 江亭 月 冷やかにして 坐ろに簫を吹く

一枝藜杖量流水 一枝の藜杖 流水を量り

多耳麻鞋陟峻嶠 多耳の麻鞋 峻嶠に陟る

奇跡題詩趣難盡 奇跡に詩を題して 趣 盡き難く

還知更使画工描 還た知る 更に画工をして描かしむることを

〔此行従者有善画者〕〔此の行の従者、画を善くする者有り。〕

【訳文】君を送るこの朝、雁の群れは初めてやつて来た。秋も深まったのだ。だから特別に思いを馳せる、君の行くところ行くところ秋景色が豊かであるのに。山の旅館では夜になると寒さで寝づらく、頻りに枕を動かすだろうし、川の亭で見る月は冷やかに冴え渡り、なんとはなしに簫を吹いたりするだろう。一本の藜の杖で川に流れ

る水量を計って渡り、たくさん耳が付いた草鞋で、険しい山々を歩き回るだろう。趣きは尽くしがたく、名勝地では詩を作って書き留めたり、また、更に絵描きに絵を描かせたりするのだろうということがはつきりわかるのだ。

〔この一行の従者には、画をうまく描くものがいたので詩中で言及した。〕

○川村翁 川村寿庵。生年未詳。文化十二年(二八一五)没。『甲子夜話』などにも描かれる江戸の名医。「奥、南部の人。江戸へ出て医を営む」(柴野栗山「名山図譜」序文)とあり、また「森銚三」(谷文晁伝の研究)、「森銚三著作集」第三卷)によれば川村翁は町医者で山を愛し、文晁に『名山図譜』を描かせた。川村寿庵。号は錦城。」(揖斐高「大窪詩仙年譜稿」『江戸詩歌論』P.619)という。川村寿庵に関して、齋藤里香「奥州南部の医師 川村寿庵をめぐる」(『岩手県立博物館便り』二〇〇七年九月号)に詳しい。○雁群 雁は晩秋に北方から来て春には帰ると言われる。○多耳 用例の少ない語だが草鞋の紐を括り付ける部分を指す。○使画工描 後に実際に『名山図譜』を描かせて出版することになる。○〔此行〕 割注で改行した評文とは区別してあるので自注であろう。この絵の得意な従者とは川村翁の履歴から考えて、後の文化元年に刊行する『名山図譜』のスケッチなどのために当時三十歳前後だった谷文晁、或いはその弟の元且などであろうか。

◎この旅立つ知人を送る送別詩は古来数多く影響関係は考えにくい
が、テーマそのものは盛唐詩中心のアンソロジー『唐詩選』に多い
ものである。

◎下平声二蕭。七律。起聯「風光」を前聯後聯でそれぞれ、川村翁
の愛好するという山と川に分けて具体的に展開し、尾聯「奇跡」で
全部を受ける構成である。

111 題鷹野忠人所居 (鷹野忠人の所居に題す)

幽居移得隣禪院	幽居	移し得て	禪院に隣る
閉戸渾無塵事仍	戸を閉め	渾て塵事の仍る無し	
常讀聖經侵夜坐	常に聖經を讀て夜を侵して坐し		
時聽佛板待明興	時に佛板を聽て明を待て興く		
苔庭餘跡必皆鳥	苔庭	跡を餘す	必ず皆な鳥
全壁題名半此僧	全壁	名を題す	半ば此れ僧
世俗休將孫敬喚	世俗	孫敬を將て喚ぶことを休めよ	
先生名貫姓元鷹	先生	名は貫	姓は元と鷹

【訳文】 隱居の願いを遂げて禪寺の隣りに引越した。閉戸先生の
ように戸を閉め切れば全く俗事がかかずらうこともない。常に聖人
の經典を夜遅くまで坐って読み、時には寺の仏板の音を聽て夜の明
けるのを待つて起き上がる。誰も入らない苔の庭に足跡を残すのは
必ず皆な鳥のしわざで、全ての壁に名を題しているのは寺の隣だけ

に半ば僧侶の作だ。世間の人々よ、閉戸先生だからと言って孫敬と喚ぶことは止めてほしい。この先生は、名は僧侶の如く貫、姓は鳥のようにもともと鷹野という方なのだ。

○鷹野忠人 山本北山の門人で、儒者。『真蘭稿甲集』下に「鷹野忠人 名は貫、魯屋と号す。東都白山鶏声窪の人なり。儒を以て業と為す。」とある。また、『詩聖堂詩話』に「名は貫、字は忠人」とある。その記事によれば『卜居集』出版の協力者である。○幽居

『真蘭稿甲集』は「卜居集」とほぼ同時期の寛政五年刊行なのでその「東都白山鶏声窪の人」という記述が詩中の鷹野忠人の「所居」であり、「幽居」を指していると思われる。白山の鶏声が窪（現文京区白山五丁目東洋大学辺）には日蓮宗朝昌山蓮久寺なども現存し、現在も寺町であるので、確定はできないが詩の表現は実態を表している。○閉戸 閉戸先生は後述の孫敬のこと。○佛板 魚板を聖經と対にするために言い換えたか。魚板は、魚型の板で禅寺などで時刻の合図にたたく。○孫敬 漢の信都の人。字は文寶。戸を閉じて讀書し、睡くなれば繩を頸にかけ、之を梁上にかく。かつて市に入るや市人は閉戸先生と呼んだという（『尚友録』）。

◎起聯「幽居」「禪院に隣る」を前聯後聯で具体的に展開し、尾聯で起聯の「閉戸」を受けて終わる構成である。後聯は僧としての貫休と鳥としての鷹を意識している。鳥である鷹や僧である貫を名に冠

する鷹野貫がこの幽居にふさわしい人物であることを言う。
◎下平声十蒸、一句目は踏み落とし。七律。

112 送甲斐士膚帰豊後（甲斐士膚の豊後に帰るを送る）

直に難波に到て 便ち船に上る
海程渺々遠相連 海程 渺々として 遠く相連なる
雲烟所望雖無國 雲烟 望む所 國無しと雖ども
星象靡行不有天 星象 行くとして天有らざる靡し
風曉揚帆衝霧去 風曉 帆を揚て 霧を衝て去り
雨宵下錠聽潮眠 雨宵 錠を下して 潮を聴て眠る
此行非是歸鄉里 此の行 是れ郷里に歸るに非ずんば
争耐羈愁入夢牽 争でか耐へん 羈愁の夢に入て牽くに

前聯豪壯。 前聯、豪壯たり。

【訳文】先ずはまっすぐに大阪に行つて、そこから船に乗る。そこからの海の旅程は、はるかかなたまで果てしなく連なっている。彼方を望んでも雲や霧ばかりでどこにも国は無いけれども、空がないところはなく星はどこでも見ることができ。風吹く曉には帆を高く揚げて霧をかまわず進み、雨降る宵には錨を下して潮の音を聴きながら眠る。もしこの旅が故郷に帰るのでなかったら、どうして旅愁が夢の中にまでに入つて来てまわりつづくのに耐えられ

ようか。

前聯は豪快壮大な表現である。

○甲斐士膚 未詳。この時期の詩仏の周辺に『幼公遺草』で追悼の

詩を寄せている甲斐貞敏という人がいるがあるいは同一人か。 ○

難波 大阪から大分へ瀬戸内海を通る船便があった。

◎起聯でいう旅のはるかさを前聯で、海の旅を後聯で展開する。それを尾聯「此の行」で受けてまとめる構成。

◎下平声一先。七律。

113 偶成

獨讀黃庭焚炷香 獨り黃庭を讀て 炷香を焚く

閑身又是比僧忙 閑身 又是れ僧に比すれば忙なり

晚來欲復蒸殘飯 晚來 復た殘飯を蒸さんと欲すれば

門外呼過小宰羊 門外 呼び過ぐ 小宰羊

小宰羊豆腐一名道着即好。 小宰羊は、豆腐の一名なり。道ひ着きて即ち好し。

【詠文】ひとり香を焚いて『黃庭經』を讀んでいる。ひまな身と言つても、僧侶に比べれば多忙なのだ。夕方になつたらまた残つた飯を

蒸すつもりだが、おりよく門の外で豆腐の売り声を通り過ぎて行く。

小宰羊は豆腐の別名だが、ここでびつたりと言ひ当てて非常によい。

○黃庭 『黃庭經』。道教の經文。 ○炷香 炷も焚も香をたく意。

○閑身の句 僧侶に比較して忙しいという類想句「若比老僧雲未閑」

(山中僧・天隨子)は『連珠詩格』に取られ、また詩仏の盟友柏木如亭の『詠注連珠詩格』にも取られているので影響関係がうかがえる。

○小宰羊 豆腐の別名。宋・陶穀の『清異録』『官志』に「時戩というものが青陽県の丞となつた。己れを潔くし民に勤めた。節約の為に肉は食はず、日に数丁の豆腐を買つて食べた。そこで村人たちは、豆腐のことを小宰羊(副知事の羊)と呼んだ。」という故事がある。

この小宰羊という別名がこの詩にびつたりとはまつていると中野素堂が評しているのは、転句で述べた殘飯を蒸して食べるような生活が儉約家の時戩の故事と響き合うからである。

◎『臭蘭稿甲集』に載る詩で(上9才「偶成」)、字句に異同はない。偶成という詩題で日常生活のスケッチの詩である。こうした素材や方法は清新性靈派の詩論に沿うものである。

◎下平声七陽。七絶。

114 賣詩翁

秃筆唯因人請揮 秃筆 唯だ人の請ふに因て揮ふ

一世休言活計微 一世 言ふを休めよ 活計 微なりと
幾斷詩腸渾賣盡 幾斷の詩腸 渾て賣り盡して

黄公墟上買鉤歸 黄公墟上 鉤を買て歸る

【訳文】ちびた筆をただ人に晝画を頼まれたときだけ揮うという暮らし。世間の人々よ、生活力が乏しいなどとは言わないでほしい。詩の中で何回も腸を断つて「詩腸」をちゃんと全て売りつくしては、黄公の酒場に行つて詩を釣るという別名の酒を飲んで帰るといふ生活をしているのだから。

○賣詩翁 詩仏は青年時代から詩仏老人と署名したがっていたといふ（大窪詩仏年譜稿）『江戸詩歌論』P.643。卜居集は詩仏二十歳台後半の作である。売茶翁などになつた詩の中だけの架空の自称か。

○黄公墟 黄公酒墟。黄公が酒を飲んだところ。黄公は秦末に乱を避けて商山に隠居した商山四皓の一人。○断腸 はらわたがちぎれるほどの悲しみ苦しみの意で詩に多用される語。詩人なので特に詩腸を断つと表現した。詩人なら詩の中で幾たびも断腸しているという意。○鉤 酒の別名、釣詩鉤を指す。

◎上平声五微。七絶。

115 郊村

夕陽揺動亂流中 夕陽 揺動す 亂流の中

熟稲芟餘半野風 熟稲 芟り餘す 半野の風

村落燕稀知社近 村落 燕 稀にして 社の近きを知り

垆場酒賤識年豊 垆場けいじょう 酒 賤せうくして 年の豊なるを識る

松丘竹場人家隔 松丘 竹場 人家 隔り

蘆岸荷坪径路通 蘆岸 荷坪 径路 通ず

忽遇兒童看客到 忽ち兒童の客を見て到るに遇ふ

賣與秋郊菌一籠 賣與す 秋郊の菌一籠

一篇流麗玩味有餘。 一篇流麗、玩味、餘り有り。

【訳文】夕陽が波で乱れる水路の表面できらきらと揺れている。熟した稲をまだ刈り尽くしてなくて、半分だけの野原に風が吹きわたる。村の中では燕を見かけることも稀になつて秋祭りの近いのに気がつき、この郊外では酒の値段が安く豊年なのを知る。松や竹のある丘や堤で人家は互いに隔っているが、蘆や蓮のある岸や平地の道は通じている。客がいると見てやつてきた子供にその道でふと出会つた。秋の山から採つてきた籠いっぱいいっばいの茸を売りにきたのだ。

この一篇は流れるように美しい。何度も愛吟しても足りない。

○郊村 范成大の「四時田園雜興」の世界を連想させる詩題である。

○燕 燕は春社で来て秋社で帰るといわれる。宋・陸游に「梁燕委

巢知社近(幽居)の類想句がある。 ○垆場 林の外まわり十里。

郊外。 ○酒賤 賤は値が安い意。陸游に「燈火市樓知酒賤、歌呼

村路覺年豐」(官居戲詠三首其一)の酒賤と年豐の同想の対句がある。

◎この詩では茸の種類は限定できないが、松茸であれば楊誠齋、六如と受け継がれている詩材であり、第二詩集『詩聖堂百絶』では詩仏自身が連作絶句を作っていて、その先駆的作品と言える。詩仏には同じテーマを繰り返し追求する姿勢が見られる。

◎上平声一東。七律。郊村の情景を次々と述べ、六句目七句目に至って主人公が散策していることがわかる構成である。中野素堂評はそれを流麗と言った。

116 尋梅

尋遍梅花行遍野 梅花を尋ね遍くして 野を歩き遍うす

短籬低椽月纖々 短籬 低椽 月 纖々

一聲長笛人歸處 一聲の長笛 人 歸る處

雪逐斜風上帽檐 雪は斜風を逐て帽檐を上る

【訳文】梅花を尋ね尽くして、野を歩き尽くした。低い籬や屋根瓦に織々たる細い月がかかる。そして人がもう帰ろうとすると、一節の長笛の音「梅花落」の曲が聞こえた。その時あたかも「梅花落」の世界のように、雪のような白梅の落花は斜めに吹き上げる風に乗ってひらひらと帽子の縁に上って来たのだ。

○低椽 椽はくつがた。鬼瓦の原形。 ○一聲長笛 横笛曲「梅花落」を暗示する。 ○處 トキと訓み、場所ではなく時を表す用法。

○雪 白梅を指す。

◎尋梅の詩題も陸游などに例が多く詩仏も繰り返し追いかけたテーマである。

◎下平声十四塩、起句は踏み落とし。七絶。

117 村居四時雜題十九首 ◇1

青松翠竹扶門垂 青松翠竹 門を扶みて垂る

聊覺朝暎影更遲 聊か覺ゆ 朝暎の影 更に遅きことを

一領綿衣新着了 一領の綿衣 新に着了し

閑携童稚謁叢祠 閑に童稚を携て 叢祠に謁す

真率可喜。歳首立松竹於門戸邦俗也歳華紀麗云松標高戸董助問礼云繫松枝于戸彼方亦有之第二句只言人心之別耳。

真率、喜ぶべし。歳首、松竹を門戸に立つ、邦俗なり。『歳華紀麗』に云ふ、「松高戸に標す」と。『董助問礼』に云ふ、「松枝を戸に繫ぐ」と。彼方も亦た之れ有り。第二句、只だ人心の別を言ふのみ。

【訳文】青い松と翠の竹が門を扶んで緑を垂らしている。その緑のせいであらう朝日の光が射す時間が遅いように感じられる。一領

の綿の着物ではあるが、新たに身につけてのんびり幼い子供を連れて木の茂った鎮守の社に詣でる。

率直な表現で喜ぶべきだ。歳の始めに松と竹を門松として門戸に立てるのは日本の風習である。しかし、『歳華紀麗』に「松を、高い戸に標す」とあり、『董勛問礼』に「松の枝を戸につなぐ」とある。かの中国にもまたこうした似た習慣があるようだ。第二句で朝日の時間が遅いと言っているのは、ただ人の感じ方がそうだと云ったのみで本当に時間が遅いわけではない。

○村居四時雜題十九首 范成大の「四時田園雜興」を模した詩題である。○青松翠竹 門松のこと。○叢祠 田舎の鎮守の社。

○歳華紀麗 類書。和刻本がある。○董勛問礼 『歳華紀麗』の同じ部分に引用されている。董勛は後漢の人。

○門松・初詣で新年の詩。四時田園雜興に倣いながらも、日本の現実や自己の個性を出そうとした意欲作である。107、108「田家」二首や115「郊村」などがその準備的作品であった。こうした姿勢は第二詩集『詩聖堂百絶』に受け継がれる。

◎上平声四支。七絶。

118 ◇ 2

氷雪春消浪漲溪 氷雪 春に消じて 浪 溪に漲る

孤村糞火隔楊堤 孤村の糞火 楊堤を隔つ
農書閑罷還牽杖 農書 閑し罷て 還た杖を牽き
試伴丁男踏麦畦 試に丁男に伴て麦畦を踏む

【訳文】氷や雪も春になってすっかり解けて消え、谷川には春水の波が漲るようになった。楊の堤を隔ててむこうに、一つだけある村では獣糞で焼き火をしている。農書の書物など調べ終わってはまた杖を引いて、試しに若い下男について行って畦の麦を実際に踏んでみる。

○糞火 宋詩に見られる語。牛糞などを焼き火のように燃やして芋などを焼いた。例えば、「牛糞火中燒芋子」（北宋・蘇軾「除夕訪子野食燒芋戲作」）など。○農書 元の王禎に「農書」がある。それ限定せず一般的に農学の書と見れば、日本では宮崎安貞「農業全書」などが普及していた。○踏麦畦 所謂、麦踏み。

◎麦踏みは初春の景物で初春の詩。獣糞を燃やすのは乾燥した地域では一般的な行為だが多湿の日本では現実ではない。つまりは興味ある詩語として詩中に採用したのだが、それは前代の格調派の、偽唐詩として批判された詩の方法論から出ていない。

◎上平声八齊。七絶。

119 ◇ 3

杏花風節雨如絲 杏花の風の節にして 雨 絲の如く

檢曆先知下種時 曆を檢して 先づ知る 種を下すの時

爐火紅殘檐滴細 爐火 紅殘して 檐滴 細く

暖衾一夜夢春池 暖衾 一夜 春池を夢む

其意專在耕稼而無復他慮抑老農之事也。

其の意、専ら耕稼に在て、復た他慮無し。抑も老農の事なり。

【訳文】雨水の時期に吹くという杏花の風がまさに吹き、まさに雨も糸のように降っている。そこで曆を調べて種を蒔く時をまず確認する。囲炉裏の火の紅は消えかかり、軒を垂れる雨滴は細くなった。暖かい寝具の中で一晩中、春の池塘に草が生い茂る時を夢みているのだ。

その心は専ら耕稼にあつて他のことは何も考えていない。そもそもこの詩は老農の事なのである。

○杏花風節 杏花は二十四番花信風の十一番目にあたる。雨水。

○夢春池 池塘春草の夢。宋・陸游「寄彦成榮歸」に「吟牽芳草夢春池」の句がある。○老農 池塘春草の夢は青春時代の楽しみであるが、ここはそうしたことなく専ら春の農耕のことを考えて

いることを言う。老農は『論語』子路「樊遲、稼を学ばんと請ふ、子曰く、吾は老農に如かず」から。中野評に「耕稼」と言っているのもここを意識する。

◎雨水は初春。

◎上平声四支。七絶。

120 ◇ 4

仲春初午雨新収 仲春 初午 雨 新に収る

家醞市肴先禱秋 家醞 市肴 先づ秋を禱る

社鼓村々響如海 社鼓 村々 響 海の如し

翠簞深處挂燈毬 翠簞 深き處 燈毬を挂く

〔邦人以仲春初午祭田神〕〔邦人、仲春初午を以て田神を祭る。〕

【訳文】仲春の初午の日、昨日とうって変わって雨も収った。自家製の酒、市で仕入れた肴で、まず秋の豊作を祈る。祭り太鼓はどこかの村々でも響きわたり海の真ん中で波音を聞くようで、緑の竹林の深いところにまで提灯がぶら下がっている。

〔我が国の人は、仲春初午の日に田の神の祭りをする。〕

○仲春初午 二月の最初の午の日。稲荷社を祭る。○邦人 以下は自注。

◎下平声十一尤。七絶。

121 ◇ 5

児荷藤籃入一溪 児は藤籃を荷て一溪に入る

溪流清處洗芹泥 溪流 清き處 芹泥を洗ふ

無端思得去年事 端無くも思ひ得たり 去年の事

月夜尋梅雪裡迷 月夜 梅を尋ねて 雪裡に迷ひしことを

右早春

【訳文】連れの子供は藤の籃を担って一筋の谷川に入っていく。川の流れの清らかなあたりで芹の泥を洗う。わけもなく去年の事を思い出した。今は雪も無くなったが、去年に月の夜に梅を尋ねて、雪の中に迷ったのだ。

右までは早春の詩である。

○藤籃 ふじのかご。藤はあるいは籐か。○溪々溪 起句の末の字を承句の頭に重用する修辭。○芹 春の七草の一つ。○去年 事 具体的な事柄があるか。○右早春 117詩からこの詩までを指す。范成大の四時田園雜興は七絶の六十首連作だが、季節の割り振りは、春十二首、晩春十二首、夏十二首、秋十二首、冬十二首となっている。この連作もそれに倣って春を早春と晩春と二つに分けた。120詩の仲春も早春の中を含めた。

◎上平声八齊。七絶。

122 ◇ 6

閑身無事日如年 閑身 無事にして 日 年の如し

小鼎颯々茗吐煙 小鼎 颯々として 茗 煙を吐く

不管人間開落事 人間開落の事に管せず

滴窗斜日背花眠 滴窗の斜日 花に背て眠る

清雅穩帖無事之境道得最佳。村居中之高者也。

清雅穩帖、無事の境、道ひ得て最も佳。「村居」中の高き者なり。

【訳文】ひまな身は特にすることも無く一日が一年のように感じられる。小さな茶釜がシューシューと鳴って茶の煙を吐いている。世間では花が開いた落ちたと言っているが、そんなことに関わりなく、窓いっばいに当たっている夕日のもと花に背を向けて眠る。

清らかで雅で穩当な表現で閑人の無事の境地を言い得て非常によい。「村居」連作中で優れたものである。

○閑身無事 「閑身無事看山眠」(元末明初・金涓「村舎」)などの類想句がある。○背花眠 「身上五勞仍病酒、天桃窓下背花眠」(唐・徐凝「長慶春」)などの類句がある。

◎下平声一先。七絶。

123 ◇ 7

夜色朦朧多彩曇 夜色 朦朧として 彩曇多し
柳條籠月翠氍々 柳條 月を籠て 翠 氍々
近来倉鼠頻為害 近来 倉鼠 頻りに害を為す
牢鎖房櫳護穉蚕 牢く房櫳を鎖して 穉蚕を護る

不熟田舎之事者不足知此詩之用意也。

田舎の事に熟さざる者、此の詩の用意を知るに足らざるなり。

【訳文】 夜色が満ち、朦朧と美しい夕焼けが広がり、柳の緑の細く垂れた枝が月を籠めている。近頃、古鼠が頻りに被害をもたらす。そこでこの時期この時間になると固く小屋の櫳窓を閉ざして幼蚕を護るのだ。

田舎の事柄に慣れていない者は、この詩の意の用い方を知るに足らないものである。

○彩曇 美しい夕焼け。 ○氍々 細長く垂れるさま。 ○倉鼠 古鼠。文字通り倉の鼠でもあろう。 ○房櫳 蚕小屋のれんじまど。
◎下平声十三覃。七絶。

124 ◇ 8

行遍江村日已斜 江村を歩き遍くすれば 日 已に斜なり
亂鶯啼送野棠花 亂鶯 啼き送る 野棠の花
南坡水暖抽蒲筍 南坡 水 暖にして 蒲筍を抜き
西塙煙濃舒茗芽 西塙 煙 濃にして 茗芽を舒ぶ

【訳文】 川辺の村を歩き尽くすと、もうすっかり日も傾いた。野棠の花の咲く中、鶯が乱れ鳴いて送ってくれている。日のある南の堤では川の水も暖かく、蒲が若芽を伸ばして、日が暮れていく西の堤では霧が濃くただよってその中に茶の芽が伸びている。

○野棠 果実の名。こりんご。 ○南坡 つつみの名。日が当たり暖かい方向だから言う。 ○蒲筍 蒲の若芽。やわらかく食用にする。
○西塙 日が暮れる方向だから言う。 ○茗芽 茶の芽。
◎下平声六麻。七絶。

125 ◇ 9

山田泥淺野田深 山田は泥淺くして 野田は深し
水潦餘痕溪斂音 水潦 痕を餘して 溪 音を斂む
柳絮閑飛半畦雪 柳絮 閑に飛ぶ 半畦の雪
東風吹暖長秧針 東風 吹き暖かにして秧針を長ず

【訳文】水田の水抜きをしたばかりで山の田は泥が浅く野の田は深くなっている。今は、水たまりの跡だけが残り、谷川から引いた水音も収まった。柳の絮が閑かに飛んで、畦半ばを白く雪のように覆う頃、春風が暖かく吹いて、稲の芽を成長させる。

○山田く野田 山田は棚田のような傾斜地の田、野田は平地の田。

○水潦 水たまり。水潦不時と言えば天候不順のこと。ここは逆に天候が順調であること。○柳絮 柳のわた。しばしば雪に喩えら

れる。○秧針 初めて生じた稲の苗。「今朝麥粒黃堪麵、幾日秧田綠似針。」（致一齋述事、宋・范成大）

◎下平声十二侵。七絶。

126 ◇ 10

桐花應候酒宜斟 桐花 候に應じて 酒 斟むに宜し

閑臥繩床養懶心 閑に繩床に臥て 懶心を養ふ

鳥影掠窓知有客 鳥影 窓を掠て 客有るを知る

呼兒為掃一張琴 兒を呼て 為めに掃はしむ 一張の琴

邦諺曰鳥影落席乃家有客。轉結新奇。

邦諺に曰ふ、「鳥影、席に落つれば、乃ち家に客有り」と。轉結新奇。

【訳文】桐の花が季節に従って咲き、酒を飲むのによい頃になった。閑かに繩を張った腰掛けに横になってただ怠惰に過ごしている。時に鳥の影が窓を掠めて客が来たらしいのを知る。そこで子供を呼んで一張の琴の埃を払わせた。

日本の諺に、「鳥の影が席にかかるとその家に客が来る」と言う。転結の二句が、新しい趣向でよい。

○邦諺 「鳥影」は、障子などに飛ぶ鳥の影が映る時は、来客がある前兆という俗信。「鳥影がして掃除する無性者」（柳の露）など類想の川柳が多い。（『江戸文学俗信辞典』石川一郎編・東京堂出版）

◎下平声十二侵。七絶。

127 ◇ 11

紫老紅衰春欲徂 紫老ひ紅衰て 春 徂かんと欲す

小園漸使月光孤 小園 漸く月光をして孤ならしむ

牡丹非是貧家物 牡丹 是れ貧家の物に非ざるも

為繫年華種數株 年華を繫ぐが為に數株を種ゆ

右晚春

【訳文】紫や紅の色とりどりの花も衰えて、春も去ろうとしている。私の小さな庭も徐々に花が無くなり月光を独りぼつちにさせてし

まっている。そこで、牡丹と言えは我が家のような貧家の物ではないのだが、季節の花を途切れさせないために数株を植えたのだ。

右までが晩春の詩である。

○牡丹 別名花王と言われる牡丹も江戸後期には庶民にも栽培が広がった。○晩春 四時田園雑興の季節の分類を踏襲している。

◎上平声七虞。七絶。

128 ◇12

林外青嵐啼勃鳩 林外の青嵐 勃鳩啼く

單衣尤好涉田疇 單衣 尤も好し 田疇に渉るに

菜花為莢筍為竹 菜花 莢と為り 筍 竹と為る

正是江村熟麥種 正是是れ 江村熟麥の種

【訳文】林の外では風が青葉を渡って吹いているが、中では勃鳩が鳴いている。田畑の耕地を行ったり来たりするのに単衣が最もいい時期となった。菜の花は莢となり、筍は竹となった。まさにこの時期、川辺の村では麦の秋という季節なのだ。

○勃鳩 鳥の名。天曇れば其の匹を逐い、晴れば之を呼びもどすという。○熟麥種 麦秋。麦は夏日に黄熟するところから。陰曆四月(礼記・月令)。

◎下平声十一尤。七絶。

129 ◇13

入梅天氣雨滂沱 入梅の天氣 雨 滂沱たり

數頃高田水作波 數頃の高田 水 波を作す

雲脚不行烟溟溟 雲脚 行かず 烟 溟溟たり

山前連唱挿袂歌 山前 連りに唱ふ 挿袂の歌

豪壯新美。可與閑身無事詩相伯仲也。

豪壯新美。「閑身無事」の詩と相伯仲すべきなり。

【訳文】梅雨入りの季節、天候は雨がたつぷりと降っている。数頃の山の高い所にある田でも水が十分に波立っている。雲は居座ったように動かず、あたりは煙って黒々としているが、山の前では繰り返して田植え歌を唄っている。田植えの真最中なのだ。

豪壯で新しい美しさを発見している。前の「閑身無事」の詩と並び賞せられる作品だ。

○連 「しきり」。底本「連り」と送り仮名を付す。「頻ハ数(シバシバ)也。連(ツツク)也」(『詩家推敲』)。○挿袂 原本「袂(たもと)」

だが詩意からも平仄式からも「秧」の誤写と思われる。挿秧歌は田植え歌。○閑身無事詩 122番の詩をさす。

◎下平声五歌。七絶。

130 ◇ 14

傍江隣舎面層坡 江に傍ふ隣舎 層坡に面す

一徑斜迴入緑莎 一徑 斜に迴つて 緑莎に入る

正識夜来漁得返 正に識る 夜来 漁し得て返ることを

合歡花底曬蘋蓑 合歡花底に蘋蓑を曬す

右夏

【訳文】川に沿つてある隣の家は幾重にも重ねた堤に面している。

一本の小道だけが緑のはますげの生える中くねくねと巡つて通じているようなところだ。見れば、一晚中漁して帰ってきたところだということがまさに分かる。合歡の木の花の下に蘋の蓑を曬して乾かしているからだ。

右までが夏の詩である。

○緑莎 緑のはますげ。 ○合歡花 マメ科の落葉喬木。六、七月頃、

花を咲かせる。夏の季語。 ○蘋蓑 苦蓑のようなニュアンスか。「疏

懶棄蘋蓑、奔忙逐華毬。」(留壩道中見稻、清・羅繞典) ○右夏 四

時田園雜興の分類と同じである。

◎下平声五歌。七絶。

131 ◇ 15

満窗柳日罩陰青 満窗の柳日 陰を罩て青し

一葉梧桐先自零 一葉の梧桐 先づ自ら零つ

僮僕不知秋始至 僮僕は知らず 秋の始て至ることを

朝来依舊掃門庭 朝来 舊に依つて 門庭を掃ふ

僮僕最忌伶俐。無情之状大好。

僮僕、最も伶俐を忌む。無情の状、大いに好し。

【訳文】窓じゅうの柳を映す日の光が、陰に青い色を籠めているようだ。そんな中、梧桐の一葉がまず自然に落ちた。召使いの子は秋の気配が至り始めていることなどは気がつきもせず、朝から今まで通りに門や庭を掃いている。

童僕は、気が利いて賢いのが一番よくない。この詩は何も気にしていない様子が非常によい。

○梧桐 梧桐の葉の落ちる音は秋の訪れを知らせるとされる。○

僮僕 召使いの子供。漢詩の中では隠者は召使いの子供の弟子をつ

れているのが定型であり、僅僕も一定のイメージで描かれる。

◎梧桐に秋の気配を感じ、童が庭を掃く様子など従来の漢詩のもつイメージを踏襲している。

◎下平声九青。七絶。

132 ◇ 16

竹舎松隣總盡歡 竹舎 松隣 總て歡を盡す

趣高半夜獨凭欄 趣高くして 半夜 獨り欄に凭る

古今一樣仲槐月 古今一樣 仲槐の月

只作人心各自看 只だ人心各自の看を作す

【訳文】竹で囲まれたわが茅舎も松の植わる隣家も、今夜は皆な歡を尽くしている。興趣深く私も夜中に独り欄干に出ている。今も昔も中秋の月は同じ美しさだが、ただ人の心は人その時々それぞれの見方をしているのだ。

◎竹舎 詩仏は墨竹図を得意とし、自宅の表現に点景としてしばしば用いている。

◎転結二句は変わらぬ月の光と見る人の変化の対比で、自然の悠久と人事のはかなさの対比という伝統的な趣向を踏襲している。

◎上平声十四寒。七絶。

133 ◇ 17

新釣鱸魚得四顛 新に鱸魚を釣て 四顛しきいを得たり

且呼隣叟盡三杯 且つ隣叟を呼て 三杯を盡さしむ

話頭忽識觀潮節 話頭 忽ち識る 觀潮節と

自至前溪繫艇回 自ら前溪に至て 艇を繫て回る

右秋

【訳文】新に鱸を釣りに行って四つえらの鱸を得た。そこで隣の老人を呼んできて三杯の酒を飲み干させた。その時の話題で今日が觀潮節だとまたま知った。そこで自分で前の谷川に行つて船をしっかりと繫いで帰ってきた。

右までが秋の詩である。

◎鱸魚 秋の景物。晋の張翰が秋風の起こつたので故郷の蓴羹と鱸魚を思い出して帰つた故事が有名。◎四顛 顛はあご、えら。鱸の別名。鱸は兩顛と四顛があるという。ここはその四顛だという意。

「鱸、巨口細鱗、似鱖。長数寸、有四顛、俗呼四顛魚。……。鱸、皆兩顛、惟松江四顛。」(正字通)。◎觀潮節 觀潮會。陰曆八月十八日の潮を見る会。ここは潮の話題から觀潮節に渡つたところで自身の船を繫ぐのを忘れていたのに気づいたということ。

◎右秋 四時田園雜興の季節分類に同じである。

◎起承二句は対になっている。四顛の対は独創的。

◎上平声十灰。七絶。

134 ◇ 18

田々水澗雁依塘 田々 水澗て 雁 塘に依る
人渡伍橋入夕陽 人は伍橋に渡て 夕陽に入る
北岸南涯誰是領 北岸南涯 誰か是れ領す
蘆花芟剩晚來霜 蘆花 芟か 剩す 晚來の霜

一幅好画圖。 一幅の好画圖。

【訳文】どの田圃も水は枯れ果てて、雁は堤に寄っており、人は低い橋を渡つて夕陽の影の中に入っていく。北の岸や南の水際はどんな風流人の領地か、刈り残してある蘆の花に晩からの霜が降りていく。

一幅の素晴らしい絵と言える。

○田々水澗 水田からの水抜き。稲刈り前に行く。 ○伍 低の俗字。
◎下平声七陽。七絶。

135 ◇ 19
凛々霜氣觸檐鈴 凛々たる霜氣 檐鈴に觸れ

曉見光芒在小星 曉に見る 光芒の小星に在るを
破却園林多少景 園林 多少の景を破却して

盆中無恙萬年青 盆中 恙無し 萬年青

冬日可怡顔者莫若盆植。轉結得閑適之情矣。

冬日、顔を怡ばす者、盆植に若くは莫し。轉結、閑適の情を得たり。

右冬

【訳文】厳しい寒さがしみるような霜の気配が風鈴に觸れて、明け方には露となつて日の光で小さな星のようにきらめいているのが見える。霜は庭の林のたくさんの景色をだいなしにしてしまったが、盆の中の萬年青だけは恙無く文字通り緑のまままだ。

冬の日に顔をほころばしてくるものといったら、植木に勝るものはない。転結二句は、閑適の情をうまく表現した。

右までが冬の詩である。

○光芒在小星 句意不明だが、仮に風鈴に觸れた霜氣が露となつたこととして解釈する。 ○萬年青 おもと。 ○盆植 盆栽というより植木。 ○右冬 ここも四時田園雜興と同じ季節分類である。
◎下平声九青。七絶。

以下、跋文を四段に分けて記述する。

卜居集批評後序

古謂從傍議者與當局者異憂。某家一副之枰方罫十九路之間猶有若此者。况咏萬象吐群情之詩評論豈容易達作家之意哉。大窪天民嗜詩癖寐不廢飲食不休于月于花喜怒哀樂唯詩之思。故其詩清新且溫籍變化入妙域。正興立下風慕而不及焉。以棋言之不翅饒我一先也。

古より謂ふ、「傍より議する者、局に當る者と憂を異にす」と。某家、一副の枰、方罫十九路の間、猶ほ此の若き者有り。況んや萬象を咏じ群情を吐くの詩の評論、豈に容易に作家の意に達せんや。大窪天民、詩を嗜むこと、寤寐に廢せず、飲食に休まず、月に于て、花に于て、喜怒哀樂、唯だ詩を之れ思ふ。故に其の詩、清新且つ溫籍、變化妙域に入る。正興、下風に立て慕て及ばず。棋を以て之を言へば、翅に我一先を饒すのみならざるなり。

【訳文】古来言うところに、「傍らから見て議論する者は、実際の対局に当たる者と悩みを別にする」というのがある。碁指しは、わずかに一そろいの碁盤の中、四角い線が十九路の間であつてもなおそんなことがあるのだ。いわんや森羅万象を詠じ様々な叙情をなす詩の評論というものは、どうして簡単に作者の意をくみ取ることがで

きようか。大窪天民の詩の嗜みかたといえは、寝ているときも止まらず、飲食時も休まず、月につけ、花につけ、また喜怒哀樂につけ、ただ詩のことだけを考えているという有様だ。従つてその詩は、清新かつ溫籍で、その変化は無限で自由自在の境地と言えよう。私、中野正興は、その影響下に立つてその風を慕っているが全く及ばない。碁將棋でこれを言えば、一目を置くどころではないのである。

○一先を饒す あるいは、囲碁の先手の利をいうか。

而天民平生每累篇什輒示之正興召批評。雖責善為吾誼既非敵手則所謂異憂之恐亦愈甚焉。其當固辭固也。雖然近世詩人溺於模擬踏襲今為識者所援而未幾頃由正路也。譬之低碁但恃舊圖不能遠出新勢也。故吾示之以天民清新之詩或猶若低手披鎮神頭圖不會勝著羸籌也。眼字警句取捨不倒者鮮矣。想天民自示之人亦復如此恐不解其鍛鍊之功者多也。

而るに天民、平生、篇什を累る毎に輒ち之を正興に示して批評を召す。善を責るを吾が誼と為ると雖ども、既に敵手に非れば則ち所謂、憂を異にするの恐れも亦た愈よ甚だし。其れ當に固辭すべきこと固よりなり。然りと雖ども、近世の詩人、模擬踏襲に溺れ、今、識者の為に援る所にして、未だ頓に正路に由ること能はざるなり。之を低碁の但だ舊圖を恃みて、遽に新勢を出す能はざるに譬ふなり。故に吾、

之を示すに天民、清新の詩を以てするも、或は猶ほ低手、鎮神頭圖を披きて勝著羸籌を會さざるが若きなり。眼字警句、取捨して倒せざる者、鮮し。想ふに、天民、自ら之を人に示すも亦復た此の如く、恐らくは其の鍛鍊の功を解せざる者多からん。

【訳文】それなのに天民は、普段から詩篇を作る毎にこれを私正興に示して批評を求める。よい作品を批評するのが自分の誼だというが、すでに敵う相手ではないので、所謂「悩みを別にする」の恐れもまた甚だしい。これは是非とも固辞すべきべきであるのはもとよりのことである。そうは言っても、近頃の詩人達は、模擬踏襲に溺れ、現在、識者がそれを改革中であるが、いまだにすぐには正しい詩の道にやるべきでないでいる。これはヘボ碁のように古い勢力を頼って、急に新しい勢いを出すことができないのに例えられる。そこで私に、その詩を示すに天民が、せっかく清新の詩でもつてしても、あるいはまるで下手な碁打ちが、難解な「鎮神頭図」を開いて勝ちの手負けの手を理解しないようなものだ。詩眼の字や鋭い句を、取捨選択して間違えないものは少ないだろう。思うに、天民は、自分で作品を他人に示してもまたこのようなもので、恐らくはその詩の鍛鍊の苦勞を理解しない者が多いのだろう。

○責善 善を行うことをすすめる（孟子・離婁下）。 ○模擬踏襲 盛唐詩の模倣を旨とした古文辭格調派を指す。 ○鎮神頭圖 唐の

大中年間に顧師言が日本の王子に勝つた棋法という。

於是自奮曰、吾聊指點真詩之佳處使不知者拭目則雖不能盡達詩意發揮其高致而亦可以為詩社之一快矣。哲人不亦謂為之猶賢乎己乎。所謂異憂之譏在所不避矣。遂為之批評。然是一時之事何圖至刻卜居集附以吾批評也。我不安乎吾心矣。桂蠹蓼蟲其性所嗜各異也。

是に於て、自ら奮て曰ふ、「吾れ、聊か真詩の佳處を指點し、知らざる者をして目を拭はしめば、則ち盡く詩の意に達し其の高致を發揮すること能はずと雖ども、而して亦た以て詩社の一快と為すべし。哲人、亦た之を為さば猶ほ己に賢ると謂ふか。所謂、憂を異にする譏は避けざる所に在り」と。遂に之が批評を為す。然れども是れ一時の事、何ぞ圖らんや、『卜居集』を刻するに至て、附するに吾が批評を以てせんとは。我れ、吾が心に安せず。桂蠹蓼蟲、其の性の嗜む所、各の異なり。

【訳文】そういうことで自ら氣を奮て言う、「私がいくらかでも真詩のよいところを指摘し、無知な者に目を開かせれば、全て詩の意を尽くし、その深い趣を表現させることはできないとしても、それでもまた詩社の一快事である。優れた人が、またこの仕事をすれば私に勝ると言うであろうか。所謂、悩みを異にする譏りは避けられない」と。結局この批評文を書くことにした。しかし、これはその一時の

事と思っていた。『卜居集』を出版することになって、私の批評文も附そうなどとは思ってもみななかった。私は、心安らかではなかった。桂を食べるシミと蓼食う虫、その性質として好む所は、それぞれ自ずと異なる。

○桂蠹蓼蟲 桂を喰う虫、蓼を喰う虫。人の好みは様々なこと。

天地間、不可無知真詩者。具眼讀之請勿以吾批評害天民之詩矣。夫棋師不恒言乎、傍觀知好著。顧是天民所望於正興之傍議乎。正興業已不能發揮其高致。敢望之於世之具眼之傍議耳。伊勢子興氏中野正興撰

〔印〕〔印〕

景山中澤恭子敬書〔印〕〔印〕

天地間、真詩を知る者無かるべからず。具眼、之を讀まば、請ふ、吾が批評を以て、天民の詩を害すること勿れ、と。夫れ、棋師、恒に言はずや、傍觀、好著を知る、と。顧ふに是れ、天民が正興の傍議に望む所か。正興、業已に其の高致を發揮すること能はず。敢て之を世の具眼の傍議に望むのみ。伊勢子興氏中野正興撰
景山中澤恭子敬書

【訳文】 広い天地の間のは、真の詩を理解する知る者がいないわけ

はない。具眼の士が、これを読んだとしたら、是非お願いしたい、私の批評でもって、天民の詩を悪く思わないでほしいと。それこそ、碁打ちで、常に言わないことがあろうか、岡目八目、と。考えてみればこれは、天民が私正興の岡目に期待したところだろうか。私は結局その深い趣を表現することができなかった。そこで敢てこれを世の慧眼の士の岡目に期待するだけだ。伊勢子興氏中野正興撰
景山中澤恭子敬書

○景山中澤 画家。生没年未詳。詩佛も含む山本北山門下の詩集『真蘭稿甲集』の跋文の板下を書いた源景山、また山本北山の序文を冠した『名人蘭竹画譜』の著者、中沢景山と同一人物と思われる。